

学校教育における身体運動文化としての「舞踊実践」ーイサドラ・ダンカンの身体表現からの考察ー

山崎正枝（金沢大学）

出嶋志津子（金沢大学学校教育学類附属小学校）

ダンスの祖であるイサドラ・ダンカンの創造的活動やダンス教育に込められた理論を知ることが、表現運動の導きを知る上で重要な手立てになる。即興による自由な自己表現でダンスを踊り、且つ子どもの可能性を求めて学校を設立したイサドラの自伝から表現法を探ることは、身体運動を引き出す一助と考える。新たにパリ五輪種目に加わるグレイキンは、その場のDJとMCにより即興的な踊りを披露する。今人気のパルクールは、移動動作を用いて身体運動を引き出すスポーツである。日頃に培った体力、運動能力と技術を組み合わせ課題解決に即興的な判断によって演舞するスポーツである。このように進化する身体運動が新しい文化を創る。学校体育では、身体を動かす楽しさを味わうことへの役割は非常に大きい。ダンス教育の必須化に身体表現を培う上で、教師のマネジメントは大きな影響を与えると考える。本研究は、誰一人取り残さない教育を求めた学校での舞踊の教育の重要性を思索する。小学校の表現運動を事例に考察する。単元を通して、児童が表現運動は楽しいと答えた児童は81.3%、仲間と動きを見つけたには90.6%であった。教師が特に示す指先や足先の意識では68.8%であったが、児童の振り返りシートには、身体を通して何かを表現する児童の思いや挑戦の意欲が書かれた。教師の手本が刺激となり、よい動きの評価や丁寧な手解き、特に自由に表現することや美しい動きに対する意識が向けられた視点は、舞踊に対する学びに繋がると考える。イサドラの教育では、美は意識が目覚めた時のみ獲得できると記述されている。イサドラがダンスを踊るに至る過程と比較して考察、授業では一つの運動を繰り返して動きの表現に繋がったこと、教師の声掛けや姿勢が身体の動きを導き映像や効果音がイメージを膨らませたことに類似と示唆する。教師の動きの評価は、学習の意欲を一層に引き出したと思われる。特に、裸足の授業は指先や足先を意識させたいとの教師の意図が窺える。映像による観察学習や動きの撮影による可視化、グループの話し合いは無駄のない流れであった。舞踊を意識したダンス教育は、よい環境やよい刺激の準備によって踊りに対して抵抗なく美的な運動体験をも重ねることができる。